

日本消化器外科学会 会誌編集委員会

本学会の機関誌である日本消化器外科学会雑誌の編集委員会と学会会員もしくは投稿者、読者の間の対話の窓口としては、編集側からは「投稿規程」、「編集後記」そして個々の投稿論文に対する投稿者との直接のやりとり、また読者からは「Letters to the editor」に限られているのが現状である。「編集後記」には各編集委員の先生方が毎号、短いながらも適切かつ意義深い珠玉の文章を記していただいております、読者の皆様には、ぜひ巻末まで読んでいただくことをお勧めしたい。その一方で、編集委員会としての正式の公式見解を、定期的に読者に伝える必要性を常々感じていた。平成8年(1996年)11月の第29巻、第11号に当時の編集委員会を代表して大原 毅編集委員長が、「日本消化器外科学会会誌編集委員会より」としてこの雑誌の目指すところ、編集方針などを述べておられるが、今回オンライン投稿・査読システムの導入や、投稿規程の見直しなどを行う機会にあたり、今一度当編集委員会の姿勢を確認しつつ、読者にそれを表明する必要があると考え、安藤暢敏担当理事および全編集委員の賛同のもとに、ここに述べさせていただくこととなった。

そこで、それに先立ち、前述した大原 毅元編集委員長の文章を精読してみた。そしてまず驚いたのは、多少のシステムの違いはあっても、現編集委員会における基本理念と当時のそれとは寸分違わないものであるということであった。これは毎月、編集委員が一堂に会し、討論してゆく中で厳然と引き継がれた姿勢と考え方が存在していることを示している。佐治重豊元委員長、上西紀夫前委員長を中心として編集委員会の歴代委員の先生方そして事務局の関係者のご尽力に思いを至さずにはおられない。すなわち伝統は確実に引き継がれているのである。そのような点からは、大原 毅元委員長の所感を繰り返すことも多くあろうとは考えられるが、現時点での状況に鑑み、今一度ここに編集委員会としての考え方を述べてみたい。

1. 基本理念

目指すところは、我が国の消化器外科学の向上に寄与し、特に若き消化器外科医の育成に貢献すること、と考えている。多くの医師がその成果を英文誌に投稿し、国際的に広く認知されたいと考えることは当然である。しかしながら一方で、日本語で論文を書くこと、またそれを読むことは、別の意味で今日その重要性が増していると考えている。消化器外科の専門誌として多くの消化器外科医の目に触れる場に論文が掲載されることは、著者にとっても読者にとってもきわめて意義深いものであろう。そのような点から日本語の良さと意義を十分に勘案しつつ、日本語によるトップレベルの雑誌すなわち、日本語で書かれた世界最高峰のものを目指している。

2. 編集方針

以上のような点から、どのような論文でも投稿されたものはまずは必ず査読を行い、できるかぎり良い論文として採用できないかという考えのもとに、ある意味愛情をもって、査読者が教育的姿勢に立脚して読ませていただいている。オリジナリティのある良質の原著論文が増加することが、最も大きな目標の一つであるが、一方で貴重な症例報告も重要視している。特に若手医師の論文執筆の端緒となる場としての本誌の意義も大きいものと考えている。その際、特に査読コメントへの対応なども含め、論文執筆指導医のあり方も重要であることを、指導される先生方にはぜひ認識しておいていただきたい。さらに、1) 医学研究における倫理、2) 患者プライバシー保護、3) 病理検体の取扱い、4) Consensus Statement on Submission and Publication of Manuscripts などの方針（投稿規程参照）の遵守もお願いしたい。

3. 査読方法

一つの論文が投稿されると、2名のペアの査読者（査読者一覧、表1）がその論文を個々に査読し、その結果を月1回定期的に開催される編集委員会で一つ一つ丁寧に全員で討議している。平均査読論文数は一人の査読者あたり月約10編で、編集委員会は毎回約3時間を費やしている。

表1 日本消化器外科学会誌編集委員会 査読者一覧

平成21年10月

	氏名	所属	氏名	所属
担当理事:	安藤 暢敏	東京歯科大学市川総合病院外科		
委員長:	桑野 博行	群馬大学医学部第1外科		
委員:	小澤 壯治	東海大学消化器外科	松原 久裕	千葉大学大学院医学研究院先端応用外科
(上部消化管)	河野 辰幸	東京医科歯科大学食道・胃外科	寺島 雅典	静岡県立静岡がんセンター胃外科
	柏木 秀幸	東京慈恵会医科大学外科	今野 弘之	浜松医科大学第2外科
(下部消化管)	竹之下 誠一	福島県立医科大学第2外科	渡邊 聡明	帝京大学医学部外科
	杉山 保幸	帝京大学溝口病院外科	長尾 二郎	東邦大学医療センター第3外科
	楠 正人	三重大学大学院消化管外科	富田 尚裕	兵庫医科大学外科
	石田 秀行	埼玉医科大学総合医療センター消化管・一般外科	竹山 廣光	名古屋市立大学医学部消化器外科
(実質臓器)	高山 忠利	日本大学医学部消化器外科	田中 淳一	昭和大学横浜市北部病院消化器センター
	杉山 政則	杏林大学医学部外科	橋本 雅司	虎の門病院消化器外科
	安田 秀喜	帝京大学ちば総合医療センター外科	山本 雅一	東京女子医科大学消化器外科
編集幹事:	浅尾 高行	群馬大学医学部第1外科	持木 彰人	群馬大学医学部第1外科

4. 現況

近年の投稿状況を表2に示す。平成20年度は、投稿論文数も500を超えるに至っており、それに伴い不採用率も増加傾向にある。

不採用論文に関しては、諸外国の多くの雑誌のように不採用になった理由を詳細に述べて返却されるものも多い。本誌においては従来から、例えば「稀少性」「新知見」などの一語で理由を記して返却している(表3)。このことに関しては委員会でもしばしば議論となるところで、「せっかく丁寧に査読しコメントを付けているのだから、これらのコメントを付けて返却したほうが良いのではないか」という意見もある。この点については今後もさまざまな御意見、客観状況をみながら対応したい。

表2 近年の投稿状況

年度(平成)	論文投稿数	採用数	採用率	不採用数	不採用率	未決数	未決率
15	345	231	66.9%	64	18.6%	50	14.5%
16	330	211	63.9%	78	23.6%	41	12.5%
17	351	223	63.5%	106	30.2%	22	6.3%
18	355	201	56.6%	126	35.5%	28	7.9%
19	447	234	52.3%	167	37.4%	46	10.3%
20	502	165	32.9%	242	48.2%	95	18.9%

表3 不採用理由の内訳

	不採用理由	※1~12月					
		平成18年		平成19年		平成20年	
		編数	率	編数	率	編数	率
1	稀少性	29	18.1%	33	19.9%	89	35.3%
2	新知見	68	42.5%	61	36.8%	76	30.2%
3	検討症例数	6	3.7%	3	1.8%	1	0.4%
4	診断の的確性	17	10.6%	16	9.6%	21	8.3%
5	治療の的確性	5	3.1%	15	9.1%	36	14.3%
6	術前検査内容	2	1.2%	0	0.0%	0	0.0%
7	論文の記載法	6	3.8%	4	2.4%	5	2.0%
8	研究デザインの科学性	6	3.8%	6	3.6%	4	1.6%
9	結果の解析法	6	3.8%	8	4.8%	2	0.8%
10	医療訴訟などの法的事項	3	1.9%	4	2.4%	1	0.4%
11	倫理性	3	1.9%	3	1.8%	0	0.0%
12	レビューアへのコメントに対する適切な対応	0	0.0%	3	1.8%	5	2.0%
13	他誌へ推奨	2	1.2%	3	1.8%	5	2.0%
14	その他(※)	7	4.4%	7	4.2%	7	2.7%
	合計	160	100.0%	166	100.0%	252	100.0%

※「その他」の例

- ・治療方針に問題点あり。
- ・術後経過が短い(1~2年の経過をみて)。
- ・同様の論文がすでに掲載予定(掲載済)。
- ・原著論文として投稿を(速報から)。

5. おわりに

編集委員会として多くの論文を読ませていただきながら、委員自身大変勉強させていただいている。また、投稿論文の増加とともにそれに伴い不採用論文も増加傾向にある。しかしながら、委員全員これらの論文も何とか採用の価値のある論文にならないかという点から出発して査読にあたっている。編集委員一同多くの能力的、時間的努力を費やしていることを十分ご理解いただければ幸いであるが、同時に皆様からのご批判も含め、忌憚のない意見をいただくこともぜひお願いしたい。

(文責：日本消化器外科学会誌編集委員会委員長 桑野博行)